



井崎正浩後援会

ソルノク市立交響楽団東京公演 鑑賞ガイド

執筆協力；ソルノク市立交響楽団実行委員会

発行／井崎正浩後援会 ©IZAKI MASAHIRO Supporter's Club 2009

はじめに

いよいよ今年 11 月後半に、我々が応援する井崎正浩氏率いるハンガリー・ソルノク市立交響楽団及び合唱団が、ハンガリー国立歌劇場ソリストと共に待ちに待った来日公演を行います。今回はこの公演を楽しみにしていらっしゃる井崎正浩後援会会員の皆様のために、同オーケストラ実行委員会の協力を得て、この公演の聴きどころや公演を何倍も楽しむため前もって知っておきたい情報などをここにご披露いたします。ぜひ熟読して観賞の手引にしましょう！

今年は＜ハンガリー記念イヤー＞

既に皆さん御承知の通り、2009 年は日本とハンガリーが外交関係を締結してちょうど 140 周年、戦後国交が回復してちょうど 50 年、そしてハンガリーが共和国体制になってからちょうど 20 年という節目の年になりました。ではこの年というのは何を表わすのでしょうか？



今から 140 年前、すなわち 1869 年(明治 2 年)というのは、ハンガリーでは長きに渡ったハプスブルグ家による統治が解かれ、この 2 年前にオーストリア・ハンガリー二重帝国としての体制が始まって間もなくの頃でした。両国は修好通商航海条約を締結して国交を開始し、その後ハンガリーは 1920 年に王国として独立したのを機に翌年日本とハンガリー王国との間で国交が樹立、1938 年に相互に公使館を設立するも第二次世界大戦中は国交が断絶し、再び 1959 年 8 月に国交が復活し 1964 年に公使館が大使館へと昇格。日本の政治家では 1990 年に時の首相である海部総理が初めてハンガリーを訪問したのをきっかけに両国の交流が活発化したのです。

一方ハンガリーは大戦後ソヴィエト連邦の統治下にあったのを、1956 年に国全土で起こった国民蜂起による革命＝ハンガリー動乱を経た後、1989 年には冷戦の終結とともに共産党の一党独裁支配から現在の体制である共和国としての民主化が行われ、これがのちにベルリンの壁崩壊に至るきっかけとなったのです。

歴史の話が長くなりましたが、このような背景があって開かれるハンガリーフェスティバルに、今回唯一ソルノク市響がハンガリープロフェッショナルオーケストラを代表して参加している訳です。これは両国の交流においても大きな意義を持つものです。

(地図上の赤い部分がハンガリーの位置です。皆さんどの辺にあるか知ってましたか？→)



<ソルノク市立交響楽団来日公演が決定するまで>

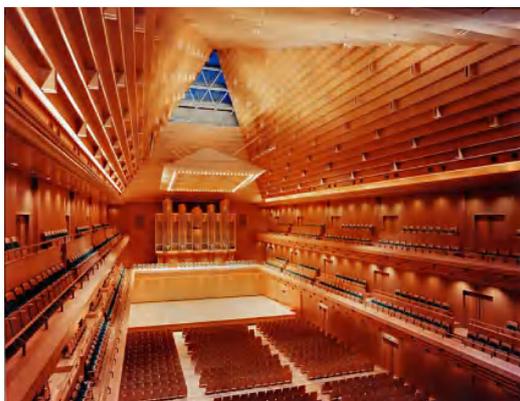
指揮者の井崎氏の話によると、来日公演の話が持ち上がったのは氏が音楽総監督に就任後、新たな所属事務所として㈱コンサート・イマジンのアーティスト契約を結んだ時のとのこと。事務所社長から「ぜひ凱旋公演を！」との申し出に加えて、折しも2009年ハンガリーフェスティバルが開催されることになり両国の間でフェスティバル内容が吟味されている最中で、ハンガリー政府・文部教育省や日本側ハンガリー友好協会でも公演開催を支援する気運が高まりました。今からちょうど2年半前のことです。それまで“ソルノク交響楽団”と呼んでいた日本での呼称も、ハンガリーのソルノク市であることを日本の皆さんに強調するために「ソルノク市立交響楽団」と呼ぶようになったのもこの頃です。

しかし突然広がった世界的な金融危機は大きな影を落とすことになりました。ハンガリーはEU＝ヨーロッパ連合に加盟していながら、世界銀行、国際通貨基金そしてEUからの多大な資金融資を要請したため国内では切迫した緊急経済対策を強いられることになり、また国外にそのニュースが大々的に報じられたためにハンガリー国の経済破綻、そしてソルノク市立交響の来日公演が多いに危ぶまれていたのは皆さんの記憶にも新しいことかと思えます。

が、結局当初の予定通り公演は開催されることになりました。ソルノク市立交響楽団という単体のオーケストラによるプロジェクトではなく、ソルノク市そしてハンガリー政府が公式に支援していたこと、日本のフェスティバル側がこの公式行事の目玉としてこのオーケストラ公演に期待していたこと、そして長年交流のあった山形県遊佐町や酒田市の全面的な招聘支援があったこと、そして何よりこうして後援会の皆さんによる実施への強い要望があったために他なりません。経済危機以降、ハンガリー政府はほぼ全ての国際交流や文化支援の特別予算を凍結しているそうですが、ブダペストでなくソルノクという一地方都市が公演実現に向け努力を重ねていたことを評価してこのプロジェクトのみに資金助成を行ったそうです。招聘業務から手を引きかけたイマジン社も、ハンガリー友好協会や山形各地の実行委員会、そして東京の実行委員会の要請を受けて引き続きマネージメントを続けることになりました。“一つの大きなプロジェクトを遂行するには組織的な大きな力が必要だが、それを支える人たちのひとりひとりの手による支援や協力こそが最後には大きくものを言う”と井崎氏は語っています。今回の演奏会(演奏旅行)が無事開催されるまでに氏の中でも大きな葛藤があったそうですが、後援会としてサポートに大きな感謝をしていると語っておられました。



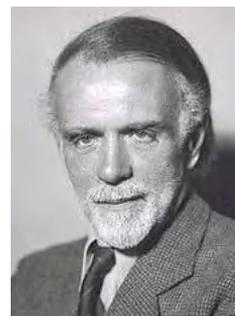
＜東京公演のあらまし＞



今回開催される東京公演は、皆様ご存じの通り 11 月 25 日(水)、同 27 日(金)の両日どちらも午後 7 時開演で。会場は東京オペラシティ・コンサートホール〈タケミツ・メモリアル〉で開催されます。この場所での開催にも井崎氏のこだわりがありました。東京にはサントリーホールをはじめオーチャードホール、東京芸術劇場などの音響や設備を誇る数々のホールがありますが、このオペラシ

ティ会場は氏が経験しているハンガリー、そしてヨーロッパのホールや教会、とりわけ合唱や声楽作品を演奏するための音響(=残響)に一番近くて適していること、客席の収容人数が 1,600 人と他の 2,000 人規模のホールのように広すぎずに席のお客様ひとりひとりに過不足なくステージ音を届けられること、楽屋とステージが近く、またお客さまにとっても交通の至便がよく、11 月後半の寒くなりかけの時期に外気に触れることなく暖かく会場に入れることなどの細かな点に至ることです。

また今回の楽曲に対するこだわりは相当なようです。ハンガリーと言えばオーケストラ、そして国立歌劇場にオペレッタ劇場がこれまで来日したことが日本の音楽ファンには知られていますが、これに加えてハンガリーが『合唱王国』であることもとても有名です。来日した合唱団公演の話題以上に、日本の多くの合唱団ではこれまでバルトークやコダーイの合唱作品、そして現代の作曲家の作品が日本中の多くの合唱団で歌われ、また曲もそれらの作曲家に数多く委嘱されています。これまで“ハンガリー国立フィル”“ブダペスト祝祭管弦楽団”“ハンガリー放送交響楽団”等の来日があったそうですが、一般的によく知られた作品の披露のみにとどまりこうした楽曲の演奏が全くなかったことから、氏の選んだ 11/27 メインプログラムはコダーイ作曲「ミサ・ブレヴィス」でした。日本ではまだあまり知られている曲とは言い難い曲ですが、これまで氏は東京アカデミッシェ・カペレ、尚美音大オーケストラ & 合唱団での演奏の経験を通じて、今回のソルノク市響の演奏にふさわしいプログラムと考えたそうです。第二次世界大戦の戦禍を逃れながら作られた作曲家の「平和に対する祈り」を込めた作品は、繁雑さに混乱する現代社会にも通じるテーマを持つようで、また加えてもう一人のハンガリーを代表する作曲家バルトークが亡命先のアメリカでの病床の中、最後の 17 小節を残して天逝した時の作品ピアノ協奏曲第 3 番には(左:バルトーク、右:コダーイ)



故郷ハンガリーへの強い思いとメッセージが込められているそうです。1995年の国際指揮者コンクールの優勝後に活動の中心をハンガリーに置き続けている井崎氏の心中にも、このハンガリーの代表的な作曲家の作品を演奏することに大きなこだわりがあったの選曲だそうです。また氏のこれまでの14年間に渡るハンガリーでの演奏活動の集大成であると話しておられました。



またもう一つの大きなトピックがハンガリーで人気随一のソプラノ歌手ロスト・アンドレア女史との演奏です。女史と井崎氏の初の共演は既に後援会報誌でもお伝えしたようにソルノクでの「プリマ賞受賞記念ガラコンサート」でのソルノク市響とのオペラアリア演奏で、この時が初の共演であったにもかかわらず演奏中の相性が良かったことや女史がこれまでに



何度も来日経験があり、すっかり親日家であったことが挙げられるそうです。井崎氏の話によると、打ち上げの席で彼女が茶そばのファンであることを聞きつけ、「日本で美味しいそばをご馳走してあげる！」との一言に、女史がふたつ返事でOKして演奏旅行同行が決まったとのこと(笑)、こんなところにも親しみを感じますね。

(上; 昨年の来日時のもの、下; プリマ賞ガラコンサート)

ロストさんと言えば、これまでミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場、ザルツブルグ音楽祭、フランス・バステューオペラ、コヴェントガーデン王立歌劇場、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場等での人気実力歌手としての数々の演奏活動に加え、我が国へもハンガリー国立歌劇場公演、新国立劇場への出演、サイトウ・キネン・フェスティバル、小澤音楽塾などへの登場と、オペラ歌手として数々のオペラに登場してその名を知られ日本にも多くのファンの方がいらっしゃいますが、実はオペラアリアコンサートとしてソロリサイタルを日本で行うのはこれが初めてだそうです…これは意外な気がしますね。今回のコンサートにはこれまで彼女がオペラの主役として歌い続けてきた役どころであるノリーナ(ドニゼッティ「ドン・パスクワーレ」)、ジルダ(ヴェルディ「リゴレット」)、ヴィオレッタ(ヴェルディ「椿姫」)等の自身が最も得意とするアリアに加え、オペレッタの役どころであるシルヴィア(カールマン「チャールダーシュの女王」)、ハンナ(レハール「メリー・ウィドウ」)、ロザリンデ(シュトラウス「こう

もり)が披露されます。これはご本人曰く極めてまれなこととか…!? 熟練の役どころの歌唱に、ブダペスト・オペレッタ劇場や日本オペレッタ協会での公演指揮を任されてきた井崎氏の棒と手兵ソルノク市響とのコラボは一体どんな名演を残すのか…これは本当に楽しみな公演です。

またアンドレアさんのアリア・コンサート、そしてソルノク市響のコンサートには両日とも大きなサプライズとして特別なアンコールが用意されているそうです。これは後援会会員の皆さんにのみ打ち明けられた井崎氏からの極秘“得”情報だとか(笑)。ぜひ演奏会終了まで楽しみたいですね。

＜プログラムの聴きどころ＞

さてそのプログラムの聞きどころについて解説いたしましょう！

011/25 ロスト・アンドレア オペラアリアコンサート

オープニングは歌劇「ファウスト」(グノー)のバレエ音楽第1曲“ヌビア人の踊り”から始まります。これはロストさんの歌い始めが同じくグノー作曲歌劇「ロミオとジュリエット」であることから選ばれた曲です。フランスオペラを代表する作曲家のひとりグノーのバレエ音楽はどれも優美で華やかなものですが、力強いオケの総奏後に続くワルツの優雅とのコントラストはこの作曲家の特徴でしょう(注: フランスオペラでは歌唱と同じくバレエのシーンが重要視されていた)。さてロストさんの登場で同じくグノーの歌劇「ロミオとジュリエット」(グノー)から“私は夢に生きたい”が歌われます。第1幕のキャピュレット家の仮面舞踏会でジュリエットが歌うアリアで、《ジュリエットのワルツ》としても知られています。ここでのジュリエットはまだロミオに会っておらず、青春真っただ中の少女の淡い恋心や憧れが歌われます。

続いて歌われるのは歌劇「ドン・パスクワレ」(ドニゼッティ)からカヴァティーナ“騎士はあのまなざしを”です。ドニゼッティはロッシーニやベッリーニと並ぶ19世紀前半のイタリア古典～初期ロマン派を代表するオペラ作曲家です。既に「愛の妙薬」「ランメルモールのルチア」等で成功を収めていたこの作曲家の円熟期の作品で、第1幕第3場で主人公ノリーナが歌う曲です。勝気で気まぐれ、それでいて愛らしいノリーナが古い騎士物語を読んでこんなことってないわよとひとり語るといふ、その性格表現がとても要求される楽曲です。

次にヴェルディの楽曲が並びます。まずはオーケストラのみで歌劇「マクベス」からバレエ音楽第1番。シェークスピアの戯曲「マクベス」を原作に作曲したヴェルディ初期のオペラで、初演から17年経ってパリ・リリック座での上演を機に作曲者が大幅な

改訂をし、第3幕にこのバレエ音楽が挿入されました。権力の座を狙うマクベスが訪れた洞穴に住む預言者たる魔女たち…その奇怪な様子をヴェルディ流に作曲されたもので、その躍動感と力強さをお楽しみください。

続けてロストさんの登場…今度は同じくヴェルディ作曲の歌劇「リゴレット」から“慕わし人の名は”です。道化師リゴレットに人目に触れないよう育てられていた美しい娘・ジルダは、父が仕える侯爵マントヴァに教会で偶然に会います。貧しい学生だと偽って名乗ったその男に世間知らずのジルダはすっかり恋に落ち、その名を慕って歌います。

そして次は同じくヴェルディの作品の中でも最も知られているであろうオペラ、歌劇「椿姫」より第1幕への前奏曲をオーケストラが演奏した後、第1幕最後に歌われるヴィオレッタの有名なアリア「ああ、そはかの人か～花から花へ」と続きます。高級娼婦としての身ながら気高く生きるヒロイン・ヴィオレッタの悲痛な思いを語るような前奏曲の後に曲調はそのヴィオレッタが暮らす社交界の華やかな趣に一転し、いちずに思いを寄せる青年アルフレッドの愛の告白を受けたヴィオレッタ自問しながらその葛藤を歌います。

☆チェックポイント1

プログラム前半はロストさんの得意とする数々のロール オペラ上の役柄 が次々と歌われますが、実際のオペラのお話の中ではジュリエット、ノリーナ、ジルダ、そしてヴィオレッタ…全ての登場人物は全く違うキャラクター 性格 付けされて登場しています。つまり、音楽自体が違うこともそうですが、ここではまだ恋を知らない夢見る少女、賢く才長けた若い女、世俗にさらされず無垢で恋に落ちたばかりの娘、恋と人生の機微を知り尽くした気高き女性…といったような全く共通点のない4人の女性を演じることとなります。ロストさんの美声やその素晴らしい声のテクニックもさることながら、こうした4つの性格分けに注意しながら耳を傾けると、またこのロストさんの新たな魅力を発見することになると思います。

休憩を挟んで後半はまずドヴォルジャークの演奏からスタートです。「チェコ組曲より」第2曲“ポルカ”がオーケストラのみによって演奏されます。前半がフランス。イタリアという色彩豊かなラテン系の音楽が並んだのに対し、後半は中央ヨーロッパであるチェコの音楽がまず演奏されることによって舞台上の雰囲気ガラッと変わることになるでしょう。こうした選曲も井崎氏のこだわりの演出と言えます。

続いて同じくドヴォルジャークの歌劇「ルサルカ」より“月に寄せる歌”がロストさんに歌われます。曲の雰囲気の変化に加えて今度は歌詞もチェコ語になります。フランス

語やイタリア語の歌詞の発音と音楽がそうであるように、あたかも夜と深い森の情景を感じさせる音楽に乗って語られるチェコ語の歌詞には、素朴ながら雄弁な語りを感じる事が出来るでしょう。

次はいよいよハンガリー音楽。“ハンガリー音楽の祖”エルケル作曲の歌劇「フニャディ・ラースロー」より“パロターシュ”です。パロターシュって何？って思われる方がほとんどでしょう…これはハンガリーに伝わる踊り＝民族舞踊の一種です。踊りのモチーフが全く同じのチャールダーシュが主に一般大衆の踊りとして定着しているのに対し、このパロターシュは「宮殿の踊り」という意味で、対象が貴族や地位の高い人、あるいは社交界へのデビュタント(これからデビューする若者)たちによって踊られるものです。気品ある出だしで始まる音楽ですが、やがて熱を帯びてきてハンガリーの情熱あふれる民族音楽へと発展していきます。

このパロターシュを受けて、ロストさんが次に歌うのはカールマン作曲の歌劇「チャールダーシュの女王」より“シルヴィア登場の歌～ジーベンピュルゲンの娘(私の故郷は山の中)”です。今回披露するオペレッタ3曲はロストさんにとっての新境地とも言えるものでしょう。特にこの曲は歌唱力のみならず民族に流れる“血”で歌うようなところがあり、民族舞曲の激しいリズムとステップの上に歌われる旋律で聴き手をあっという間にハンガリーの空気に取り込んでしまう…きっとそんな舞台になるに違いありません。

オペレッタ2曲目はレハール作曲の歌劇「メリー・ウイドウ」より“ヴィリアの歌”です。前述の「チャールダーシュの女王」と同様、井崎氏にとってこの「メリー・ウイドウ」はブダペスト・オペレッタ劇場の来日公演で氏の名を世間に大きく知らしめた特別な作品と言えるでしょう。今回はヴィリアの歌だけでなく、その前に演奏される第2幕・幕開けの序奏～舞踊(ハンガリー舞曲“コロ”)と音楽が続き、そのクライマックスにトランペットのファンファーレと共に主人公のハンナが登場してヴィリアの歌を歌う…そんな演出も考えられているそうです。これは本当に楽しみ！

さてプログラム最後に披露されるのはヨハン・シュトラウスⅡ世作曲による歌劇「こうもり」より“チャールダーシュ”です。オペラ、オペレッタの枠を超えて、数々の名歌手たちによって歌われてきた作品ですが、ことこのアリアに関しては別！やはりハンガリー人による演奏は、固有の音楽感(観)と伝統に培われている“本場もの”であるに違いありません。序曲の一部に続いて演奏されるアリアの前奏クラリネットが鳴った途端、オペラシティの舞台はオペレッタ劇場と化していることに気付くかもしれません？ 久しぶりにオペレッタ指揮で演奏する井崎氏の手腕も楽しみなところですよ！

☆チェックポイント2

プログラム全般に渡って演奏されるオーケストラの楽曲にも注目です！
「椿姫」前奏曲以外は全て舞曲＝バレエ音楽や民族舞踊曲です。ロストさんの歌唱に対して、このオケのフレキシビリティ(様々な楽曲への適応性)やレパートリーの広さをこうした楽曲で“さりげなく”披露する…こうしたところにも指揮者としてのこだわりが垣間見えるようです

○11/27 ソルノク市立交響楽団・合唱団コンサート

いよいよこのオーケストラと合唱団、そして井崎氏の本領が発揮される演奏会です。オープニングはバルトーク作曲「ハンガリーの風景」で、曲は以下のようなタイトル5曲による組曲で構成されています；

第1曲「セーケイの夕暮れ」 第2曲「熊踊り」 第3曲「メロディ」 第4曲「ほろ酔い加減」 第5曲「豚飼いの踊り」

元々はどれもバルトーク自身のピアノ曲を自身の編曲によって管弦楽曲にされたものです。1曲目は現在ルーマニア領であるセーケイ地方(トランシルヴァニア地方から東に続く場所)の夕暮れの様子を表した曲で、クラリネットの寂しげな旋律が発展して平原の広々とした風景を彷彿とさせます。井崎氏は音楽総監督に任命されてすぐ、オーケストラと共にこの地方を訪れ、もとはハンガリー領であるこの地の風景とそこに残って頑なに生活するハンガリーの人々と触れ合って大きな感銘を受けたそうです。きっと演奏に反映されていることでしょう。

2曲目の熊踊りというのは熊が荒々しく踊っている有様…ではなく、捕らえられた熊が可哀そうなことに熱した鉄板の上に放たれ、熱さのあまりじっと出来ずにのたうち回って動く有様を模倣した…そんな言い伝えの踊りだそうです。一体どんな踊りでしょうか？ 音楽から想像してみましよう！

3曲目は物悲しく寂しい風景にある旋律が聴こえている…そんな情景です。バルトークはその晩年に(アメリカで)作曲した「管弦楽のための協奏曲」の中でも“エレジア(哀歌)”という雰囲気の良い似た曲を加えています。彼にとってハンガリーのこうした原風景は生涯故郷を愛する気持ちと共に生き続けたのでしよう…。

4曲目はちょっとユニークな曲です。ハンガリーでも生活の中にお酒は欠かせません。農民たちは酒を飲み交わして笑い、語り合い…しゃっくりしたりロレツが回らなくなるうちに、時として議論が始まったり酔いが回って千鳥足になったり…バルトークのユーモアが随所に溢れています。

5曲目が豚飼いの踊り。農夫が棒を持ってたくさんの豚を追いかける有様…その情景

に映る愉快的な踊り…バグパイプのような楽器に合わせて踊るカナスタンツと呼ばれる踊りは豚飼いの踊りという名から独立して、もうチャールダーシュのような踊りの分野になっています。

☆チェックポイント3

「ハンガリーの風景」では木管楽器が活躍します。冒頭のクラリネット、II“熊踊り”のファゴット、III“メロディ”やIV“ほろ酔い気分”おけるオーボエやフルートなど…ソルノク市響の管楽器奏者の名人芸に注目です！

続けて演奏されるのは同じくバルトーク作曲ピアノ協奏曲第3番です。ピアノのソリストは干野宜大(ほしの・たかひろ)氏で、桐朋学園音大からリスト音楽院にハンガリー政府給費生として学んだ逸材です。氏と井崎氏とは今年2月のフライハイト交響楽団との同プログラムで共演を行い、また今回の東京公演に先駆けてさる9月1日「ソルノクの日」祝祭演奏会でソルノク市響とも共演を果たしています。まさに東京公演に照準を合わせた演奏を重ねてきていたのですね。



このバルトークのピアノ協奏曲は、作曲者がアメリカに亡命した後にこの世を去る直前に書かれた作品です。アメリカの生活が馴染めず、しかも不治の病に侵されながらも必死の思いで書き続けたこの作品には、作曲者の故郷ハンガリーに対する望郷の念や、死ぬ間際にあっても衰えなかった作曲者の優れた技法が盛り込まれていると井崎氏は述べています。

☆チェックポイント4

干野氏の確かなテクニックはもちろんですが、すでに共演済みのオーケストラと氏とのコラボレーションに注目したいですね。特に第2楽章に出てくる森のざわめきや鳥の鳴き声?にも似た箇所でのソロピアノと管楽器や打楽器とのやり取りに注目です！

さて休憩後の舞台には合唱団が登場しています。ソルノクの市立プロ女声合唱団

「バルトーク・ベーラ室内合唱団」そして彼女たちが混声として活動する際のパートナー「ソルノク・コダーイフェスティバル合唱団」、そして今回の公演のために井崎氏の呼びかけで結成された「ハンガリーフェスティバル合唱団 Tokyo」の合わせて 60 人の合唱団です。

まずはハンガリーの合唱団のみによる無伴奏合唱、チェミツキー作曲「アヴェ・マリア」が演奏されます。1954 年に生まれたこの作曲家は戦後世代のハンガリーの合唱界で大きな役割を担いこれまで数々の作品を送り出しています。近年日本でも紹介されることが多くなってきましたが、中でもこのアヴェ・マリアは特に印象に残る作品と言えるでしょう！ ハンガリーの合唱団の水準の高さにも是非注目です。



続けて演奏されるのがいよいよメインプログラム、コダーイ作曲「ミサ・ブレヴィス」です。これは 1942 年～1944 年という第二次世界大戦の最中に書かれた曲です。ナチス・ドイツの台頭で戦火にさらされていた中ブダペストから離れた修道院に籠って作曲され、初演は教会の地下室で行われたという作品です。全篇にコダーイの「平和への祈り」が溢れるような作品ですが、民族色豊かな強いリズムやコダーイ独特の転調などにはハンガリー音楽のエッセンスともいべき要素が感じられます。最初オルガン伴奏によって書かれた曲ですが、今回演奏されるのは作曲者自身が初演 6 年後に改編したオーケストラ版です。演奏にはオーケストラとオルガン、そして混声合唱団の他、3 人のソプラノソロに、アルト、テノール、バスのそれぞれのソリストが必要です。3 人のソプラノの 1 番高い部分をロストさんが歌い、その下の 2 つのパートをバルトーク室内合唱団のショモギさんとタツマンネさんが歌うという布陣です。アルトのボコルさん、テノールのムックさん、バスのイエクルさんはもう何度も井崎マエストロと共演した常連ソリスト。今回も息の合った演奏が期待できるとのことです！

ミサ・ブレヴィスというのは元々「小さなミサ曲」という意味ですが、ここで演奏される音楽はとても小さいとは呼べない大きな建築物のような雰囲気を持っています。井崎氏が声楽とオケをどう融合した音楽を展開するかを楽しみにしたいものです。

☆チェックポイント4

オーケストラと合唱が織りなす美しい響きには是非身を置いて聴いてください。音楽空間に見える景色や湧き立つ感情に浸ることこそ宗教音楽の醍醐味ですし、そこに奏でられる音楽はまぎれもなくハンガリーです。きっと心に残る演奏となるでしょう！

さて演奏のプログラムはすべて終了…ところが前述の通り井崎氏から特別に教えてもらった極秘情報が「アンコール曲」の演奏！ もちろんここで何の曲が演奏されるかをバラすわけにはいきませんが(苦笑)、そこを何とか!!というお願いに対して井崎氏からはヒントを頂いております…

「アンドレアさんはもちろんこのコンサートの流れで数曲の有名なアリアをアンコールに用意なさっていますが、それに加えていま彼女がこれからのライフワークとして取り上げたいある作曲家の楽曲を用意しています。演奏するかしないかは当日の彼女の気分次第?ですが、出来ることならぜひこの響をご披露したいですねえ~!」

「今回ソルノク市響のコンサート演奏にあたっては、皆さんおなじみのハンガリーにちなんだ楽曲を用意していますが、でもせっかく合唱団もいることだし何かコラボレーションしたいと考えています。でも普通の曲じゃつまらないし…あっと驚くサプライズを用意したいですね!」

最後に井崎氏から皆さんへのメッセージです!

「いつも応援なさって頂いている後援会の皆様には是非今回の演奏会を楽しんでもらおうと、このような冊子を用意して頂きました。ずいぶん分量になりましたが(笑)、ぜひ前もって頭に入れてきてくださいね。」

今回は井崎氏のこだわりが随所に溢れる演奏会になりそうですね。東京オペラシティがハンガリーの劇場になる?そんなことも想像できるようです。オペラシティの空間が井崎氏の望む音響空間になるよう、また今回の演奏会が成功するように、今後とも後援会では客席がお客さんでいっぱいになるよう働き掛けたいと思っております。ぜひ皆さま更にお友達を誘って演奏会に足をお運びください。公演チケットは事務局でもまだ取り扱っております!!

井崎正浩後援会事務局スタッフ